ノブレス・オブリージュにみる思想的差異：
村上ファンドの阪神タイガース上場提案とマンチェスター・ユナイテッド買収問題を契機として

Difference of ideas in Noblesse Oblige: Consideration as motivations of Murakami Fund offers to list Hanshin Tigers's stock and the purchasing plan for Manchester United

1K06B182　　比奈本　真
指導教員　主査　志々田文明先生　　副査　リー・トンプソン先生

【はじめに】

2006 年、村上世彰氏率いる MAC アセットマネジメントによる阪神電気鉄道株の大量保有と、それに伴う阪神タイガース上場提案が話題を集めた。一方、その前年にはイギリスにおいて、マンチェスター･ユナイテッドがマルコム･グレイザー氏に買収される事例もあり、新聞紙上でも引き合いに出されるなどした。筆者は常々スポーツにおける文化的観点とビジネス的観点の相容れなさを感じてきたが、殊更これらの事例における経営陣の態度やメディア、ファンの声といった様々な要素の中に、日本とイギリスでは明らかに異なるスポーツに対する文化観、即ち思想的差異が存在するように感じた。このような問題意識から本論文では、その思想を帰納的推論に基づき、持てる者の義務（ノブレス･オブリージュ）と設定、その証明という第一課題と、以下の 3 つの下位課題を設定した。

1）阪神電鉄株買収時の世相分析、2）欧州におけるノブレス･オブリージュ成立過程の把握、3）日本におけるノブレス･オブリージュ成立過程の把握、以上 3 点である。これらを通して、第一課題である思想的差異の存在証明と考察を行う。

【第 1 章　思想的差異の認識】

第 1 章では、阪神タイガース上場問題、そしてマンチェスター･ユナイテッド買収問題夫々の起こった当時の世相を見るため、重心は主に前者に置きつつ、当時の資料を俯瞰した。更に双方の事例における差異としてのノブレス･オブリージュを帰納的推論によって定義し、以降の考察方法について解説した。

【第 2 章　欧州におけるノブレス･オブリージュ】

第 2 章では、はじめにノブレス･オブリージュの概念について解説を記した。次に欧州を基盤に据えつつ、イギリスを中心としたノブレス･オブリージュの発現を歴史に求め、その源泉を探るため古代のカエサル、ガリア戦記などの記述から、近代のイギリス、プリムローズ･リーグの選挙活動にみられるノブレス･オブリージュまで、構造的な視点をもって叙述した。

【第 3 章　日本におけるノブレス･オブリージュ】

第 3 章では、第 2 章と同様の構造を貫きつつ、舞台を日本へと移し、そのノブレス･オブリージュの歴史について俯瞰した。律令制以前から律令時代には階層、階級、順列に類する身分の制定･明文化、封建時代には武士の精神性、そして近代では貴族院におけるノブレス･オブリージュに

ついて叙述した。

【結論】

1章の俯瞰風景から、2章、3章の構造的な視点を通過した結果を踏まえ、その共通項や類似から、ノブレス・オブリージュが発現する諸条件、更に思想の差異の発見に基づく、戦前と戦後の日本人の非同一性について考察した。ノブレス・オブリージュは思想的差異のひとつとして確かに存在し、また日本におけるそれが貴族院の廃止と共に消失した事実から、戦前、戦後の日本人の非同一性が認められる。思想の断絶を持つ現代の我々が担うスポーツへの提言として、ノブレス・オブリージュの草創を踏まえた新たなプロトコルの設定が必要である、と考えた。